

磐城時報

九夕 日刊
本報社 磐城石城郡平町三丁目十四番地
電話 二二二
印刷所 磐城石城郡平町三丁目十四番地
印刷 磐城石城郡平町三丁目十四番地
発行所 磐城石城郡平町三丁目十四番地
一部金銭 一月五元 三月十五元 半年三十元 一年六十元
廣告料 一行十四字 第一日五字 第二日四字 第三日三字 第四日二字 第五日一字
▲日刊(日曜) 休刊

赤・白の腕章物々しく 争議漸やく険悪化する

百数十名十警炭會本部を襲ふ 検束者百名に達す

内郷村警備隊に於ける労働争議は去る四日日本坑夫組合員熊谷長右衛門、中丸勇等が高坂坑警備隊事務所にて散々に殴打され當日會社の警備隊山崎某亦坑夫組合員の爲に殴打された等警備隊の衝突は漸やく険悪化する前兆を呈して来た事既に報の如くであるが、その後御大喪に遭ふたので警察當局並に會社側では七日、八日兩日労働者に静謐を保つやう示達する處があつたので、一般でも當日の争議は漸やく静寂した。二日間極めて平事局から高増検束

混亂を豫想さる、 二ヶ所の演説會

警察死力を盡して警戒

九日拂曉 漸やく東六が白みそめた午前五時半頃日本坑夫組合員百五十余名は各々左腕に赤の腕章をつけて高坂坑下警備隊事務所を襲撃し屋舎を自茶苦茶に破壊し居合せた會員六名を殴打して暴行約數分の後凱歌を奏して意氣揚々と引きあげた。急報に接した警備隊本部から出所前なる警察側警備本部から七十余名 急行し主謀者と目す可き 經坑池野彌太郎(三七)宮川島

大瀧事件公判

本縣對平町の大瀧發電所水利權取消に關しての紛擾は屢報の如く前後五ヶ年の永きに亘つて警署中にも遂に行政裁判所によつてその是非曲直を決定せんとするの行政訴訟第三回の口頭辯論は愈々九日午前十時から開廷されるので被告の縣知事代理として里見事務官及び新井發電水利係主任技師が出廷原告側代理として争事となつて居る。

炭礦争議で 商人大こぼし

御大喪儀のため休戦した警備隊の労働争議は資資兩者とも強硬な態度をとつてゐるので炭礦關係の商人連は一層不景氣となつてゐるのみか坑夫や雜夫たちに賃物つげられた物品の代價を請求に行つては、それ處の騒ぎではないと追ひ附され一向資金の回収が出来ないので悲鳴をあげてゐる。

葬場殿 参入雑感

去る七日御大葬當日新宿御苑の葬場殿に参入を許された當日の模様は東京新聞で御承知の事であらうから、雑感に止める。

首謀者鹹首

新聞社代表に控所がラント張りて出来たあつた、内に炭火が山の様、熱いお茶の用意があつて寒さ知らず、他の参入者は六時頃から十二時まで寒風にさらされ通して参入者が骨身にこたへた事であつたらうが、私等だけは特別の御優遇感に堪へる事であつた。

御大喪活動

東日社の御大喪活動
中町青年團主催東京日々新聞社撮影にかゝる御大喪活動寫眞會は十日平町警備隊共濟病院横で午後五時半、午後八時の二回に映寫し一般に無料觀覽せしむる映寫である。

平模擬市會 市會議員得票

一三五票	吉田寅之輔氏
一四二票	井上貞次郎氏
一三六票	綠川喜三郎氏
一三二票	馬目雅治氏
一二〇票	三森虎雄氏
一〇一票	白井一郎氏
九十九票	高橋龜松氏
九十八票	柴田徳二氏
九十二票	關内正一氏
九十二票	吉村安次郎氏
七十四票	齋藤英三郎氏
六十二票	鈴木昌雄氏
六十票	萩原義雄氏
四十五票	馬目武之助氏
四十三票	大森勇氏
四十二票	櫻井清氏
四十票	酒井清氏
三十八票	山野東次郎氏
三十二票	阿部政右門氏
三十二票	猪狩庄平氏
三十一票	草野順平氏
三十票	眞木恒氏
二十八票	山崎徳次郎氏
二十五票	應橋正見氏
二十五票	諸橋守次氏
二十三票	遠沼龍輔氏
二十三票	杉本榮一氏
二十一票	横山顯氏
二十一票	鈴木邦三郎氏
二十一票	鈴木武雄氏
二十一票	山崎清三氏
二十一票	高倉精一氏
十八票	佐藤武之氏
十六票	山田盤廣氏
十四票	千葉彦治氏
十二票	諸橋元三郎氏
十二票	瀧澤俊平氏
八票	市原守馬氏
七票	關内久次郎氏
七票	須田甚太郎氏
七票	渡邊源吉氏
六票	須田正次氏
六票	中野康平氏
六票	山野大五郎氏
五票	長瀬延太郎氏
五票	吉田喜代治氏
三票	多田井笑次郎氏

四時川電氣 創立總會

植電に合併

植田町四時川電氣工業株式會社創立總會は六日前午時同町植田水力電氣株式會社内に開いたが出席者は安島重三郎、高岡唯一郎、江尻博孝、山崎與三郎、馬上一誠、鈴木辰三郎、小林誠次、中野甲藏、古川傳一、金成通その他發起人多数、金成氏の挨拶に次いで同氏座長となり役員を決定した後植田水力電氣會社に合併する件まで可決した當日決定した役員は

取締役金成通、安島重三郎、山崎登、監査役古川傳一、金成三郎
諸氏であるが、同社の資本金は二百萬で植田水力電氣會社は一躍五百萬圓の大會社となつたわけである。

阿部政右衛門氏が 正貫取引の 石炭小賣店開業

元平町驛前九通運送店主阿部政右衛門氏は今回運送店を合併して平運輸會社となつたので舊九通運送店尾倉を阿部石炭店と改稱し石炭の小賣を開業する事になつたが、阿部氏は従來石炭卸商には深い經驗を持つてゐるが平町の小賣石炭は従來正貫取引でなく俵を單位としたため往々にして内容不足したものあるに

投票 用紙

模範平市會議員

映畫界

照る日くもる日

(前篇) 徳川の末幕府其閣老の懐刀として信任を得て居た旗本加納八郎は當時の新智識たる蘭學の一端をも研究してゐた、又一面には紅燈緑酒の巷にも脚を入れてゐるかと思へば當時の勤王論者又は青書生等を極度に嫌つて極めて至嚴な取締を敢行せんとする徳川幕府無二の忠臣で而もそれが表面からでなく裏面で策動する所謂黒幕の男であつた、一刀流の指南岩村鬼堂も八郎のみならず鬼堂の一人娘を妙の意中の男は八郎が勤王の首魁として鬼堂に討たしめんことを細木新之丞の息年尾であつた、八郎の邸へ鬼堂が呼ばれた鬼堂の隣の町家へ強盗が入つた、それは山崎の首領白峰と銀と呼ぶ女賊の仕業であつた、新之丞は年尾に鬼堂の宅を守り自ら賊を追拂

つた、新之丞も亦裏へ廻ると軍用金を集める爲の斬取強盗を働いてゐたのだ、而もそれが銀一派の使ふ符號を知つてそれを使用してゐたのであつた、お銀一味はこれを知つて新之丞に害を加へようとしたがお銀は彼の夜年尾の男振りに惚れ込んでゐたので戀の弱味は新之丞殺害を躊躇せしめた新之丞一味が深川の材木小屋に隠れて協議した夜、八郎等は一味を指揮して之を襲つた新之丞は危ふく逃れ川邊へ

冬の情景!!!

静かに深みゆく
公園池畔に
御來遊あれ



松ヶ岡公園の 電話二二六番

來た時追つて來た鬼堂と一騎打をした、無論新銳の鬼堂が勝つべき筈であつたのに銀の年尾に對する戀心其のビストルで却つて鬼堂を倒し新之丞を救つた。鬼堂の絶命の時來合せた加納八郎に鬼堂はた妙の約束を破ることを云つたが八郎は之れに従者秘密にする機命じた、お銀に助けられた新之丞は、自己の邸に歸るや直ちに密書を年尾に持たせて深川富岡門前の占者白雲堂の許へ走らせた、捕手の一隊は年尾を逐ふて來た。(平篇)



品と値の競争なら絶対負けぬ
靴値下げ断行...市價の二割安
警城の平、田町
大塚支店 製靴部
電話七〇二番
運動具部
電話三四八番

電話四六〇番は
美味で評判の イワキ食堂
實習日毎月十五日(家庭的料理實習所)

生活改善!!!
紋服・九帶・袴・羽織・喪服
かつぎ等衣類一切扱升
カキキキ
御婚禮衣裳特に勉強・髪飾・ハコセコ・烏臺類一切
元費節約!!!
入買價高ギルフ
升と伺ニ第次報一御
物立仕・着古・質
店裳衣貸屋荷茗
六一三電 一ジカルフ

洋服と外套類
●每朝眞白な霜柱が立ち身も切られやす
うな北風が吹き荒む寒い冬も直ぐで
●當なやかは例により變つた洋服類を
かて体裁のよい種々な防寒用具新入
格安に豊富に準備致しました

●脊廣三ツ組	スコツチ	13・50	ヨリ
●詰襟上下組	サージ	11・00	ヨリ
●オーパ	メルトン	8・00	ヨリ
●グランド	同	5・00	ヨリ
●トシ	甲斐絹裏	15・50	ヨリ
●モジ	リ	5・00	ヨリ
●婦人コート	甲斐絹總裏	10・00	ヨリ
●學生マント	黒頭巾付	3・40	ヨリ

其の他各種防寒用具新入
なかや洋服店
平町二町目【電二〇三】

カキは一の井
料理はカキ
良品廉賣に勝る商略なし!!!
警城セメント會社特約店
和洋銅鐵
金物問屋
釜屋商店
警城平 電話九一三九番

辯護士長谷川陸郎 出張法律事務所
民、刑事事件親切に取扱ひ申候
並貸金及買掛代金の取立、貸借關係の整理部の設あり
主任 渡邊 忠次郎
平町川丁目(郵便局裏通り)

◆愈々他會社競映畫公開◆
フログラム
森野五郎一人三役大活躍、川田芳子主演
時を定めず常に變らぬ人の慾心、幕末の頃名家の御墨附
時を中心し妖婦、策士、與力、マンジヤと名つて術策を弄
せしは今も尚世人に語り傳へらるる黒髪夜叉物語り
謹而 御大喪儀 上實 映現

喜劇界の大王小泉嘉輔主演
現代 極圓満 全五卷
呑めは必ず人好になん安月給取の新吉、夜のカーフェーに
於て...種々の喜劇を演ず
天才子役高尾光子、春海清子主演
母性愛 いとしの我子 全八卷
雨の朝風の夜常に我身に注ぐ愛...可憐な乙女の悲しき
愛の物語
見よ鏡映畫 大日活超特作大映畫
劍士河部五郎 大河内傳次郎主演
連時 照る日くもる日 前篇
徳川末葉時代に起る不可解な事件...一刀流名劍士の白
刃暗に狂い旗本の横暴展開する事件に突如現る奇怪な人
物白雲堂...如何なる人?
當る九日より上映 平 館